

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：32408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380888

研究課題名(和文) 幼児・児童における創造的協調性の発達と育成

研究課題名(英文) Development and enhancement of preschoolers' and elementary schoolchildren's creative cooperativeness

研究代表者

名尾 典子 (NAO, FUMIKO)

文教大学・人間科学部・講師

研究者番号：10327041

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：親が子どもの協調性を評定する項目と親自身の子育てに関する項目を含む質問紙を作成し、小学1-6年生2034名と幼稚園児269名、保育園児63名の保護者に回答を求めた。小学生の保護者の結果をもとに協力志向、協調的問題解決、調和・同調の3下位尺度からなる親評定・児童用多面的協調性尺度と応答・共有、統制・要求の2下位尺度からなる子育てスタイル尺度が作成された。親評定・児童用多面的協調性下位度の得点は、3尺度とも女子が男子より高く、学年が高くなるほど高くなる傾向がみられた。応答・共有が高い親の子どもは、協力志向と協調的問題解決が高い傾向がみられた。調和・同調には子育てスタイルの影響はみられなかった。

研究成果の概要(英文)： We prepared a questionnaire which contained items with which parents assessed their children's cooperative traits and their own parenting styles. Parents of 2034 elementary schoolchildren, 269 kindergarten children, and 63 nursery school children answered the questionnaires. Based on the analyses with the data of the parents of elementary schoolchildren, Multifaceted Cooperativeness Scale for Children Assessed by Parents and Parenting Style Scale were developed. The former comprises three subscales; Cooperation, Collaborative problem-solving, and Harmonious conformity, and the last contains two subscales; Responsive sharing and Controlling demanding. The scores on the subscales of Multifaceted Cooperativeness Scale for Children Assessed by Parents were higher in girls and children in upper grades. The parents whose scores of Responsive sharing Scale were high tended to assess their children high on Cooperation and Collaborative problem-solving.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：協調性 児童 幼児 発達 子育てスタイル 多面的協調性尺度 親評定尺度 教師評定尺度

1. 研究開始当初の背景

(1) 協調性の発達とその規定因を検討する研究を行うことを目標に、まず、協調性の起源と発達についての文献研究を行った(登張, 2010)。そして、協調性概念を、自他の意見を尊重し、両者にとってより良い解決を図ろうとするセルマンの協調的対人交渉方略をとるといったような積極的、創造的意味合いを含めた概念として捉え直し、既存の協調性尺度の項目を参考にするとともに、新たな内容の項目も考案して質問紙を作成し、大学生対象に2度の調査を実施した(第1調査:大学生396名を対象に2011年7月実施;第2調査:大学生497名を対象に、2011年12月、2012年1月実施)。二つの大学生データの分析結果をもとに、協調スキル(自他の両方の意見を尊重し新たな解決を目指す、他者受容)、非協力(協力しない、人の意見を聞かない)、調和志向(相手に合わせる)、協力志向(進んで協力する)の4下位尺度からなる新たな協調性尺度が作成された(登張他, 2012a)。協調的対人交渉方略の内容の項目は協調スキル尺度に含まれていた。

(2) 大学生対象の2度目の調査で用いた質問紙には、妥当性検討のために、ビッグ5調和性尺度、相互独立的・相互協調的自己観尺度、多次元共感性尺度、親和動機尺度等の尺度と、協調性の発達の要因を検討するために、家族関係、サークル体験、ボランティア体験についての項目を含めていた。協調性下位尺度とそれらの変数との関係を検討すると、協調スキルと協力志向、調和志向はBig5調和性、社会的価値志向性、他者への親和・順応、親和傾向、共感的関心、感情欲求抑制と正の相関を示し、非協力はそれらの変数と負の相関を示した。個の認識主張との関係は、協調スキルと協力志向は正、調和志向は負の相関を示し、評価懸念とは、調和志向と協力志向は正、非協力は負の相関を示し、協調スキルは有意な関係を示さないなど、下位変数間の違いも明らかとなった(登張他, 2012b)。サークル活動と協調性下位尺度との関係を検討すると、サークル活動熱心群は協調スキルと協力志向が高く、サークル・リーダー群は協調スキルが高かった。また、音楽系サークル所属群と委員会所属群は協力志向が高く、非協力が低かった(登張他, 2013a)。

(3) 2012年5と6月に、大学生105名を対象に、新たに作成した協調性尺度の再検査信頼性を検討するため、同尺度を内容とする質問紙調査を2度実施した(登張他, 2013b)。

2. 研究の目的

幼児期と児童期に焦点を合わせ、この時期に協調性、とくにその積極的創造的側面はどのように発達し、どのような要因がその発達に寄与するか、またどのように育成できるかを検討する。

3. 研究の方法

(1) 教師対象の調査

大学生対象の調査で用いた協調性の項目を参考にして、教師が生徒の協調性等を評定する項目を考案した。これらの項目のほか、生徒をどのような人に育てたいか、教師が考える協調性イメージに関する質問項目、協調性育成に関する取り組み(自由記述)を含む質問紙を作成し、小学校教師61名、中学生教師21名、高校教師14名を含む教師103名(その他は養護学校教諭、幼稚園教師など)を対象に、2013年7-8月に調査を実施した。

(2) 高校生対象の調査

大学生対象の調査で用いた協調性に関する項目の一部の表現を変更したものに、妥当性検討のための多次元共感性、親和傾向、感情欲求抑制尺度、協調性の発達の要因を検討するための仲間関係発達尺度、家族関係、部活とボランティア体験に関する項目を加えて、高校生対象調査用の質問紙を作成した。この質問紙を用いて、高校1-2年生男子325、女子380、不明1、計706名を対象に2014年2月に調査を実施した。

(3) 幼児・児童の保護者対象の調査

大学生対象の調査と教師対象の調査で用いた協調性に関する項目を参考にして、親が子どもの協調性等を評定する項目と親自身の子育てに関する項目を含む質問紙を作成し、小学1-6年生の子どもを持つ東京都と埼玉県の小学校計6校の保護者2034名と幼稚園児を持つ東京都の幼稚園1園に通う幼稚園児を持つ保護者269名、東京都と埼玉県の保育園計2園に通う保育園児の保護者63名を対象に調査を実施した。質問紙の配布と回収は小学校や幼稚園、保育園の教師に依頼した。この保護者評定児童用質問紙には、協調性との関連が予想される役割取得、他者への配慮、規則遵守等の項目も含めていた。

(4) 小学3-6年生対象の調査

大学生対象、教師対象の調査で用いた協調性に関する項目を参考にして、小学3-6年生が自分の協調性等の傾向について自己報告する質問紙を作成し、保護者対象の調査を依頼した東京都と埼玉県の計6校の小学校の教師に小学3-6年生への配布と回収を依頼した。小学3-6年生1530名が回答した(男子694、女子729、不明107名)。

4. 研究成果

(1) 大学生対象の調査

2011年12月-2012年1月に実施した調査のデータを用いて、協調性下位尺度の性差と専攻による違いを検討した。性差については、協調スキルは女性が男性より高く、非協力は男性が女性より高く、協力志向と調和志向には性差がみられなかった(登張他, 2013b)。大学の専攻では、文系は協調スキルが高く、理系は非協力が高い傾向がみられた(登張他, 2013c)。2012年5、6月に実施した大学生対象の2度の調査の結果から、協調性下位尺度の再検査信頼性が確認された(登張他,

2013b)。

当初、協調的スキルと命名していた尺度は協調的問題解決尺度、非協力尺度は非協調志向尺度と名前を変更し、4下位尺度を合わせた尺度を多面的協調性尺度と命名した。一部表現が過激と思われる項目があったため、削除した(登張他, 2016a)。

(2) 教師対象の調査

協調性に関する項目の小学校教師による小学生の評定と中学生教師による中学生の評定を比較したところ、小学生より中学生の得点が有意に高かった項目には、協調的問題解決、調和志向、非協力志向、役割取得を表す項目が含まれていた(登張他, 2014a; 名尾他, 2016)。

子どもをどのような人に育てたいかという質問で最も得点が高かったのは「相手の気持ちを考えて行動する人」という項目だった(登張他, 2014b; 名尾他, 2016a)。

協調性についてのイメージを問う質問で、特に得点が高かったのは「周りの人と良い人間関係を作る」「相手の気持ちを考えて行動する」「他人によく協力する」等であった(名尾他, 2015)。

教師による子どもの協調性を育む取り組みで最も記述が多かったのは、小グループで活動し、全体の前で発表するという取り組みであった(大山他, 2015)。

(3) 高校生対象の調査

高校生のデータを因子分析すると、大学生データの因子分析結果と対応する協調的問題解決、調和志向、非協調志向、協力志向の4因子が抽出され、それをもとに4下位尺度を作成した(登張他, 2015b)。多面的協調性下位尺度と多次元的共感性下位尺度等との関係を検討すると、協調的問題解決と協力志向、調和志向尺度は他者志向的共感を測定する共感的関心、認知的共感を測定する気持ちの想像、親和傾向、感情欲求抑制と正の相関を示し、非協調志向はそれらの尺度と負の相関を示すこと、自己中心的共感を測定する個人的苦痛は調和志向とのみ正の相関を示すこと、仲間関係発達尺度のうち仲間への同調プレッシャーを表すピア・プレッシャーは調和志向とのみ正の相関を示すこと等が明らかとなった。性別については、協調的問題解決と調和志向は女性が男性より高く、非協調志向は男性が女性より高く、協力志向には性差はみられなかった。家族関係のなかできょうだい構成による違いがみられ、末っ子は協力志向、協調的問題解決が高く、非協調志向が低い傾向がみられた。部活動、委員会活動の効果もみられ、運動部、特に団体スポーツの部活所属群は協力志向が高く、文化系部活所属群は調和志向が高く、委員会所属群は非協調志向が低かった(登張他, 2015a)。ボランティア活動経験群は協力志向が高い傾向がみられた。

(4) 幼児・児童の保護者対象の調査

協調性の諸側面を表すと考えられる 22 項

目について、小学1-6年生2034名の親のデータを因子分析すると、大学生データの因子分析で抽出された協調的問題解決、協力志向、調和志向に対応する3因子が抽出されたが、非協調志向に対応する因子は抽出されなかった。3因子をもとに3下位尺度からなる親評定・児童用多面的協調性尺度を作成した。調和志向に対応する因子の負荷量が高い項目には同調を表す項目も含まれたため、この因子をもとに作成した尺度は調和・同調尺度とした(登張他, 2015c)。

小学1-6年生の児童の親評定・児童用多面的協調性下位尺度の性別と学年の2要因分散分析を行うと、3尺度とも性別の効果が有意で女子が男子より高く、学年の効果も有意で、学年が高くなるほど得点が高くなる傾向がみられた。多重比較を行うと、協力志向は、1年生は4-6年生より低く、協調的問題解決は、1年生は3-6年生より低く、6年生は1-4年生より高く、調和志向は、1年生は6年生より低かった(名尾他, 2016b)。幼稚園児も加えた分析では、協調的問題解決と協力志向は、幼稚園年少群は小学生より低いが、年長群は小学生と差がなく、調和志向は、幼稚園児より小学生の方が高かった(名尾他, 2016c)。保育園児と幼稚園児を比較すると、保育園の男児、特に3歳児男児の協調的問題解決、協力志向が低い傾向がみられた。保育園の5-6歳の女児は同年齢の幼稚園女児より協調的問題解決、協力志向が高い傾向がみられ、保育園児は幼稚園児よりも男女差が顕著であった。

親が自分の子育てについて答える項目について、小学生の保護者のデータを用いて因子分析を行うと、子どもに真摯に向き合い、子どもとの時間を大事にすることを表す因子と子どもを厳しくしつけようとしていることを表す因子が抽出され、それぞれをもとに応答・共有尺度と統制・要求尺度を作成した(登張他, 2016b)。この2尺度の得点の高低から権威ある、権威主義的、許容的、関心低の4群を分類し、各群の親評定の児童の協調的問題解決、協力志向、調和・同調尺度の得点を比較した。それによると、小学生については、協力志向と協調的問題解決は「権威ある」と「許容的」が「権威主義的」と「関心低」より高く、協力志向は「権威主義的」が「関心低」より高かった。調和・同調には子育てスタイルの効果はみられなかった(登張他, 2016d)。幼稚園児と保育園児については、協力志向と協調的問題解決は「権威ある」と「許容的」が「関心低」より高かった。調和・同調には子育てスタイルの効果はみられなかった(名尾他, 2017)。

大学生、高校生対象調査で、サークルや部活の効果がみられたため、習い事と協調性との関係について検討した。小学生では、スポーツ系習い事をしている群は協調的問題解決と協力志向が高く、文化系習い事をしている群は協調的問題解決が高い傾向がみられ

た(大山, 2017)。幼児では, スポーツ系習い事群が習い事無し群より協力志向が高かった(田村他, 2016)。

高校生ではきょうだい構成の効果がみられた(大学生ではみられなかった)ことから, 幼児と児童におけるきょうだい構成の効果についても検討したところ, 女子では, 長子は一人っ子より協調的問題解決と協力志向が高く, 中間子は一人っ子より調和・同調が高い傾向がみられた(田村他, 2017)。

親評定児童用質問紙に含めていた役割取得, 他者への配慮, 規則遵守等の項目について, それぞれ主成分分析と内的整合性分析を行い, それをもとに親評定の役割取得, 他者への配慮, 規則遵守, 自己主張, 親和性, 同情の6尺度を作成し, 親評定・児童用多面的協調性下位尺度との関係と, 各尺度の性差と学年差について検討した(Tobari et al., 2016b; 登張他, 2017)。それによると, 役割取得と他者への配慮は親評定・児童用多面的協調性下位尺度のいずれとも強い関係にあり, 協調的問題解決はその他に規則遵守と, 協力志向は親和性と, 調和・同調は自己主張の低さと強い関連があることが明らかとなった。役割取得と他者への配慮と規則遵守は女子が男子より高く, 学年が上がるにつれて高くなった。自己主張は男子が女子より高く, 学年の効果はみられなかった。親和性は性別の効果も学年の効果もみられなかった。同情は女子が男子より高く, 学年が高いほど高い傾向がみられた。

(5) 児童対象の調査

児童の自己報告質問紙の結果については, 未発表であるが, 親評定児童用多面的協調性尺度の下位尺度と同様の尺度を, 主成分分析を用いて作成すると, 協調的問題解決と調和・同調に対応する尺度の内的整合性が低く, 因子分析では1因子性が示唆された。児童の自己評定尺度は全般に得点が高く, 特に低学年(3年生)の得点が高い。正確に自己評定できているかどうか疑問である。

<引用文献>

名尾・登張・首藤・大山(2015)。教師が考える「協調性」イメージ 発達心理学 26 回大会 P7-31。
名尾・登張・大山・首藤(2016a)。教師が考える児童生徒の協調性 文教大学人間科学部研究, 37, 111-118。
名尾・登張・首藤・大山・田村(2016b)。親の評定による小学生の協調性の発達 発達心理学 27 回大会 PB-36。
名尾・登張・首藤・大山・田村(2016c)。幼児と児童の協調性の発達と性差 教育心理学 58 回総会 PG09。
名尾・登張・首藤・大山・田村(2017)。幼児の協調性と親の子育てスタイルとの関係 発達心理学 28 回大会 P8-38。
大山・登張・首藤・名尾(2015)。教師による子どもの協調性を育む取り組み 発

達心理学 26 回大会 P3-79。

大山・登張・名尾・首藤・田村(2017)。親評定による児童の協調性と習い事との関係 発達心理学 28 回大会 P8-40。

田村・登張・名尾・首藤・大山(2016)。親評定による幼児の協調性と習い事との関係 発達心理学 27 回大会 PC-29。

田村・登張・名尾・首藤・大山(2017)。幼児と児童の協調性ときょうだい構成との関連性 発達心理学 28 回大会 P8-41。

登張(2010)。協調性とその起源 Agreeableness と Cooperativeness の概念を用いた検討 パーソナリティ研究, 19, 46-58。

登張・大山・首藤・木村・名尾(2012a)。協調性尺度の開発 心理学 76 回大会論文集, 23。

登張・大山・首藤・木村・名尾(2012b)。協調性尺度の妥当性の検討 パーソナリティ心理学 21 回大会論文集, 52。

登張・大山・首藤・名尾・木村(2013a)。大学生の所属サークルと協調性との関係 発達心理学 24 回大会発表論文集, 417。

登張・大山・首藤・名尾・木村(2013b)。協調性尺度の再検査信頼性と性差の検討 教育心理学 55 回総会発表論文集, 280。

登張・名尾・大山・首藤・木村(2013c)。大学の専攻による協調性尺度等の得点の違い 心理学 77 大会発表論文集, 44。

登張・名尾・首藤・大山(2014a)。教師が評定する小中学生の協調性 心理学 78 回大会発表論文集, 17。

登張・名尾・首藤・大山(2014b)。教師は生徒をどのような人に育てたいか 教育心理学 56 回総会 PB072。

登張・首藤・大山・名尾(2015a)。高校生における部活・委員会への所属と協調性との関係 発達心理学 26 回大会 P7-30。

登張・首藤・大山・名尾(2015b)。多面的協調性尺度の作成 高校生データをもとに 教育心理学 57 回総会 PG060。

登張・名尾・首藤・大山(2015c)。親評定・児童用多面的協調性尺度の作成 心理学 79 回大会発表論文集, 991。

②1 登張・名尾・首藤・大山・木村(2016a)。多面的協調性尺度の作成と大学生の協調性 文教大学人間科学研究, 37, 151-164。

②2 登張・名尾・首藤・大山・田村(2016b)。子育てスタイル尺度の作成 発達心理学 27 回大会 PF-36

②3 Tobari, Nao, Shuto, Oyama, & Tamura(2016c)。Parental Assessment of Cooperativeness, Role-taking, Consideration for others, Obedience to rules, Self-assertion, Affiliation and Sympathy in Schoolchildren.

ICP2016.

- ②4登張・名尾・首藤・大山・田村(2016d). 児童の協調性と親の子育てスタイルとの関係 教育心理学会 58 回総会 PC17.
- ②5登張・名尾・首藤・大山・田村(2017). 小学生の役割取得, 他者への配慮, 規則遵守の性差と学年差 発達心理学会 28 回大会 P8-39.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

名尾・登張・大山・首藤(2016). 教師が考える児童生徒の協調性 文教大学人間科学研究, **37**, 111-118. 査読なし

名尾(2016). 発達障害グレーゾーンの補遺有縁女兒における共感性の発達～要支援児保育巡回指導の事例を通じて～ 文教大学大学院臨床相談研究所紀要 **20**, 19-30. 査読なし

登張・名尾・首藤・大山・木村(2016). 多面的協調性尺度の作成と大学生の協調性 文教大学人間科学研究, **37**, 151-164. 査読なし

[学会発表](計 26 件)

名尾・登張・首藤・大山・田村(2017). 幼児の協調性と親の子育てスタイルとの関係 発達心理学会 28 回大会 PB-38.2017 年 3 月 27 日. 広島国際会議場(広島県広島市)

大山・登張・名尾・首藤・田村(2017). 親評定による児童の協調性と習い事との関係 発達心理学会 28 回大会 P8-40. 2017 年 3 月 27 日. 広島国際会議場(広島県広島市)

田村・登張・名尾・首藤・大山(2017). 幼児と児童の協調性ときょうだい構成との関連性 発達心理学会 28 回大会 P8-41. 2017 年 3 月 27 日. 広島国際会議場(広島県広島市)

登張・名尾・首藤・大山・田村(2017). 小学生の役割取得, 他者への配慮, 規則遵守の性差と学年差 発達心理学会 28 回大会 P8-39. 2017 年 3 月 27 日. 広島国際会議場(広島県広島市)

名尾・登張・首藤・大山・田村(2016b). 幼児と児童の協調性の発達と性差 教育心理学会 58 回総会 PG09.2016 年 10 月 10 日. サンポートホール高松(香川県高松市)

登張・名尾・首藤・大山・田村(2016c). 児童の協調性と親の子育てスタイルとの関係 教育心理学会 58 回総会 PC17. 2016 年 10 月 10 日. サンポートホール高松(香川県高松市)

Tobari, Nao, Shuto, Oyama & Tamura(2016b). Parental assessment

of cooperativeness, role-taking, consideration for others, obedience to rules, self-assertion, affiliation, and sympathy in schoolchildren. The 31st International Congress of Psychology, PS26P-02-145. 2016 年 7 月 26 日. Exhibition Hall, Annex Hall(Kanagawa, Yokohama)

名尾・登張・首藤・大山・田村(2016a). 親評定による小学生の協調性の発達 発達心理学会 27 回大会 PB36. 2016 年 4 月 29 日. 北海道大学(北海道札幌市)

田村・登張・名尾・首藤・大山(2016). 親評定による幼児の協調性と習い事との関係 発達心理学会 27 回大会 PC-29. 2016 年 4 月 30 日. 北海道大学(北海道札幌市)

登張・名尾・首藤・大山・田村(2016a). 子育てスタイル尺度の作成 発達心理学会 27 回大会 PF-36. 2016 年 5 月 1 日. 北海道大学(北海道札幌市)

登張・名尾・首藤・大山(2015c). 親評定・児童用多面的協調性尺度の作成 心理学会 79 回大会 1 PM-128. 2015 年 9 月 22 日. 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

登張・首藤・大山・名尾(2015b). 多面的協調性尺度の作成 教育心理学会 57 回総会 PG060. 2015 年 8 月 28 日. 朱鷺メッセ(新潟県新潟市)

名尾・登張・首藤・大山(2015). 教師が考える「協調性」イメージ 発達心理学会 26 回大会 P7-31. 2015 年 3 月 21 日. 東京大学(東京都)

大山・登張・首藤・名尾(2015). 教師による子どもの協調性をはぐくむ取り組み 発達心理学会 26 回大会 P3-79. 2015 年 3 月 20 日. 東京大学(東京都)

登張・首藤・大山・名尾(2015a). 高校生における部活・委員会への所属と協調性との関係 発達心理学会 26 回大会 P7-30. 2015 年 3 月 21 日. 東京大学(東京都)

登張・名尾・首藤・大山(2014c). 教師は生徒をどのような人に育てたいか 教育心理学会 56 回総会 2014 年 11 月 7 日. 神戸国際会議場(兵庫県神戸市)

登張・大山・首藤・名尾(2014b). 共感性, 協調性と向社会的傾向, 向社会的行動との関係 パーソナリティ心理学会 23 回大会 PA12. 2014 年 10 月 4 日. 山梨大学(山梨県甲府市)

登張・名尾・首藤・大山(2014a). 教師が評定する小中学生の協調性 心理学会 78 回大会 1 AM-1-005. 2014 年 9 月 10 日. 同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)

木村・登張・大山・首藤・名尾(2013). 大学生のボランティア活動と協調性との関連 パーソナリティ心理学会 22 回大

会.2013年10月12日.江戸川大学(千葉県流山市)

大山・登張・名尾・首藤・木村(2013b).
大学生のいじめ加担経験が仲間関係・協調性・共感性に与える影響 パーソナリティ心理学会 22 回大会.2014年10月12日.江戸川大学(千葉県流山市)

⑳ 登張・名尾・大山・首藤・木村(2013d).
共感性,親和性,感情欲求抑制が大学生の協調性に及ぼす影響 パーソナリティ心理学会 22 回大会.2014年1月12日.江戸川大学(千葉県流山市)

㉑ 名尾・登張・大山・首藤・木村(2013) 親和動機,内的作業モデル,仲間関係が大学生の協調性の発達に及ぼす影響 心理学会 77 回大会.2013年9月20日.札幌コンベンションセンター(北海道札幌市)

㉒ 大山・登張・名尾・首藤・木村(2013a).
大学生の仲間関係が協調性と共感性に及ぼす影響 心理学会 77 回大会. 2013年9月21日札幌コンベンションセンター(北海道札幌市)

㉓ 登張・名尾・大山・首藤・木村(2013c)
大学の専攻による協調性尺度等の得点の違い心理学会 77 回大会. 2013年9月21日.札幌コンベンションセンター(北海道札幌市)

㉔ 登張・大山・首藤・名尾・木村(2013b).
協調性尺度の再検査信頼性と性差の検討 教育心理学会 55 回総会.2013年8月18日.法政大学(東京都)

㉕ Tobari, Nao, Oyama, & Shuto (2013a).
Factors promoting the development of active and creative cooperativeness in Japanese youth. American Psychological Association 121st Annual Convention.2013年8月1日 Waikiki, Hawaii Convention Center (USA)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

名尾典子 (NAO, Fumiko)

文教大学人間科学部講師

研究者番号: 10327041

(2)研究分担者

首藤敏元 (SHUTO, Toshimoto)

埼玉大学教育学部教授

研究者番号: 30187504

登張真穂 (TOBARI, Maine)

白百合女子大学生涯発達研究教育センター研究員

研究者番号: 60599405

大山智子 (OYAMA, Tomoko)

白百合女子大学生涯発達研究教育センター研究員

研究者番号: 40598786

(3)連携研究者

木村あやの (KIMURA, Ayano)

昭和女子大学生生活心理研究所助教

研究者番号: 00527575

(4)研究協力者

田村沙織 (TAMURA, Saori)

あきる野市教育相談所